

教会を信ず

エペソ 4:1~6

コロナ禍が一年半も続いています。ワクチン接種が進み、また幾つか治療薬も出てきて少し将来への希望の光が差し込んできているような面があります。しかし、また冬の感染拡大に備える必要があるとも言われています。そんな中、教会も今まで味わったことのない大きな試練に直面しています。教会とは建物のことではなく、クリスチャンが複数いること自体、教会であると私達は理解しています。しかし今は、人が集まること自体出来ません。そうすると私たちにとって教会とはどのような存在となるのでしょうか？ キリストのからだに一人一人がつながり、からだを成り立たせているというのはどういうことなのでしょう？ このことは今、私たちがしっかりと考え理解しておくべきことだと私自身思われています。そのことをみことばから今日共に学び、みことばが示すように歩みを進めたいと思います。

1. 先ず教会とは何でしょうか？

使徒信条は、「我は聖霊を信ず」のあとに、「聖なる公同の教会…を信ず」と続けています。私たちは、使徒信条を唱えるたびに「教会を信ず」という言葉を繰り返すのですが、いったい、「教会を信ず」とはどうすることなのでしょう。「全能の父なる神」と「聖霊」は目に見えないお方ですから、神や聖霊を「信じる」というのはよく分かります。「イエス・キリスト」は目に見えるお方で、初代の弟子たちは「見て、聞いて、手で触った」のですが、今日の私たちは、「イエス・キリストを見たことはない」し、「今見て」はいません。けれども、聖書にあるように、私たちはイエス・キリストを「愛しており、…信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」(ペテロ第一 1:8) 信仰は、目に見えない事実を現実にし、今、ここで体験させてくれます。イエス・キリストを信じる信仰を与えられ、この信仰の力を受けていることを、心から感謝したいと思います。

さて目に見えない神、キリスト、聖霊は「信じる」ものですが、教会は目に見えるものなのに、わざわざ「信じる」と言うのはどうしてでしょうか。それは教会は目に見えるものであるとともに、目に見えない面を持っているからです。教会は、そこに人が集まり、何らかの活動をし、組織や建物があるというだけのものではありません。それだけなら、他の団体と何も変わるところはありません。教会にはそれ以上のもの、もっと本質的なものがあるのです。それがなければ、どれだけ多くの人が集まっても、また、盛んに活動をしていても、それは、教会とは呼べません。ですから「教会を信じる」というのは、教会の目に見えない本質を、信仰によって知り、現実のものとするということなのです。

聖書では、教会は「神の民」、「キリストのからだ」、そして「聖霊の宮」と呼ばれています。神は旧約時代にイスラエルを神の民として選ばれました。それは、神の救いを体験したイスラエルが、今度は他の国々に神の救いを告げ知らせるためでした。しかし、イスラエルはその使命を忘れてしまい、国々に神の救いを告げ知らせどころか、自分たちの救いすら保てなくなっていました。それで神は新約時代に、あらゆる国々の中からイエス・キリストを信じる者たちを選び、彼らを神の民とし、キリストの救いを地の果てまで宣べ伝えるという使命をお与えになりました。つまり教会は福音を伝えるという使命を与えられた新約時代の神の民なのです。福音を伝えることが無い教会は教会と呼べません。

また、教会は「キリストのからだ」です。これは、キリストの手足となって働く「からだ」のようなものという意味ではありません。「キリストのからだ」というのは、たとえではありません。教会は、かしらであるキリストといのちのつながりを持った、実際の「からだ」です。手や足がどんなに素晴らしくても一つのからだとして血が流れていないと生きたからだでないように、キリストとのいのちのつながりを持たなければ、それは、生きた教会ではないのです。「キリストのからだ」と言われるときには、教会がキリストのいのちによって生かされ、成長し、実を結ぶものであることを言っているのです。

さらに、教会は「聖霊の宮」です。聖霊は、キリストを信じる者ひとりひとりのうちに住まわれるとともに、教会を「神殿」、「宮」、「聖所」として選び、神を礼拝し、神の栄光を現すところとされています。

教会が「神の民」であること、「キリストのからだ」であること、そして、「聖霊の宮」であることは、信仰によって、聖書から学ぶのでなければ、理解することができません。信仰を持つ時に多くの人は聖書の真理を感情的な面で捉えます。私も初めて教会に行った時に教会の人が温かく自分を迎えてくださったことが信仰に入る大きなきっかけになっています。とても大切な経験です。しかし、信仰者として成長する中で次第に聖書の真理を主体的、かつ客観的に受け止めることも必要となります。子供と大人の違いは何でしょうか？子供は基本、自己中心です。自分が感じたまま言ったり、行動したりします。“嫌いなものは嫌い”“好きなものは好き”“いやなことはしない”といった具合に。しかし大人は自分を客観的に見る事が出来ます。気持ちとしては働きたくないと思っても、家族のことを思うと働きます。使命感とも言えるでしょう。そして信仰者は神が教会を通して与える使命感に生きる時に、子どもが自分の思い通りになって嬉しいのとは比べ物にならないぐらいの喜びに満たされるのです。

私たちは、使徒信条で「教会を信ず」と告白するたびに、教会にとって、目に見えるものがすべてではないこと、教会がたんなる人の集まりだけでなく、父なる神、キリストと聖霊のものであることに、あらためて気付かされるのです。そして、目に見えるものよりも、目に見えないものがもっと大切であることを教えられます。教会は私達によって形造られますが私達のものではありません。

2. では私達は何をするのでしょうか？

教会が「神の民」、「キリストのからだ」、「聖霊の宮」であることを信じ、それを確認するのは、教会が「神の民」として使命を果たし、「キリストのからだ」として成長し、「聖霊の宮」として、その存在を世に示すためです。「教会を信ず」というのは、たんに、「教会とはこういうものだ」ということを述べるのではなく、教会を、そのようなものにしていくことなのです。

教会には「神の民」として、神の救いの恵みを告げ知らせる使命が与えられています。ペテロ第一2:9に、こうあります。「しかし、あなたがたは選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたをやみの中から、ご自分の驚くべき光の中に召いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」ペテロはキリストが私達を闇から光の中に招いて下さったと言います。自分自身を信仰を持つ前と持った後と比べてみるとどうでしょうか？人によってその度合いが違ってしまうでしょうが持つ前の世界に戻りたいという人がいるのでしょうか？もちろん部分的にはありますよ。あの高校生の時代に戻れたらなとか中学時代は輝いていたなとか。でも総じて信仰者とされて感謝だなど思われるのではないのでしょうか？その神の救いの恵みを大きくても小さくても告げ知らせる使命が私達には与えられているのです。これが福音宣教です。初代教会は、宣教の教会でした。イエスが「あなたがたは…エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」（使徒1:8）と言われたように、使徒たちはキリストの証人となりました。パウロはこう言います。

「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」（使徒20:24）そして、この使命は、使徒たちだけでなく、キリストを信じるすべての人にも、同じように与えられています。「キリストの証人になる。」この使命は、初代教会から、21世紀の今日まで変わることがありません。一般の企業ですと、例えばトヨタ自動車は最初は豊田佐吉さんが人力の機織機を作っていた会社であったように業務や製品の内容が変わることがよくあります。けれども、教会は二千年間、「福音を伝える」という同じ働きを続け、変わることがなかったのです。そして、それはこれから後も変えてはならないものなのです。また「キリストの証人になる」とは、教会として組織立てて伝道してゆくことも大切ですが基本的には信仰を持つひとりひとりのキリスト者が、その置かれた場所で「キリストの証しびと」となり、身近な人々にキリストを証ししていくしかないのです。「教会を信ず」と告白するたびに、わたしたちに与えられたキリストを証しする使命を、新たにしていきたいと思えます。証しとは相手を議論で打ち負かすこと

ではありません。信仰が与えられ、救われたことは感謝なことなんですと伝えることなのです。

3. とともに成長しましょう。

教会は「神の民」として、キリストを証しします。では、教会は「キリストのからだ」として何をするのでしょうか。エペソ 4:16 にこうあります。「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」教会は「キリストのからだ」として、キリストのいのちによって生まれ、成長していくのです。教会には、外に向かって福音を宣べ伝えていくという使命とともに、自らを成長させていくという務めもあるのです。もちろん、成長させてくださるのは神ですが、キリスト者ひとりひとりにも、教会と自分自身の健全な霊的成長を目指していくためになすべきことがあるのです。こうも言えます。教会は、自らが成長することなしには、出て行って福音を伝え、まわりの人々に仕える力を持つことができず、その実を結ぶことができないのです。

教会の成長にとって大切なことは、いくつもありますが、今日の箇所には、「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」

(エペソ 4:2,3) とあって、「一致」することが教えられています。そして、この一致は、それぞれの教会の中での一致ばかりでなく、すべての教会の一致のことも意味しています。「謙遜」、「柔和」、「寛容」、「愛」、「忍耐」、「平和」は、ひとつひとつの地域教会ばかりでなく、キリストにつながるすべての真実な教会の間でも実現されなければならないのです。聖書は、教会は最初から「一つ」であると教えています。日本語では「エペソの教会」、「ピリピの教会」と訳されていますが、原語では「エペソにある教会」「ピリピにある教会」です。つまりひとつの教会が、エペソにも、ピリピにも、そして、全世界にも散らばって存在していることを表しています。ですから蛍池聖書教会は蛍池にある教会です。神は唯一でありひとつの神の民しかお持ちになりません。キリストはおひとりですからひとつのからだしかお持ちになりません。「からだは一つ、御霊は一つです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」(エペソ 4:4,5) とある通りです。この言葉は、どの国にある、どの教派の教会であれ、本物の教会は、他の教会から離れて、独立して存在しているのではないことを教えています。すべてキリストの教会であるなら一つのキリストのからだにつながっているのです。スポーツや、将棋や囲碁などの世界では、互いに競いあうことによって技術が成長していきます。しかし、教会の霊的な成長は、教会のメンバーが互いに競いあったり、この教会とあの教会、あの教団とこの教団を比べたり、競いあってできるものではありません。エペソ 4:16 に「キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることとなります」とある通り、私たちは、一致と愛の中ではじめて成長することができるのです。そして、この一致が、人々にキリストの愛と恵み、救いを最も効果的に証しするのです。一致がなければ成長しないし、力強い証しも起きません。教会が「ひとつ」であることを覚え、一致を目指していくとき、私たちは、「神の民」としての使命を果たし、「キリストのからだ」として成長することができます。「われは教会を信ず」と告白するとき、教会の一致が現実のものとなるよう祈り、励みたいと思います。祈ります。

天の父なる神様 私たちは様々な背景を経て、救われ、教会の一員とされています。教会に、連なる一人一人に神様は福音宣教とキリストのからだなる教会を成長させてゆく使命を与えておられます。どうかその神様からの使命に生き、使命を果たすことが出来るように私たちを導いてください。教会が成長し、使命に生きる時に教会は祝福されます。そして教会の祝福が一人一人の信仰者の試練と問題の解決につながることを覚えます。この週の歩みも「われは教会を信ず」の信仰によって歩ませて下さい。主の御名に+よって祈ります。アーメン